



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行/カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年9月20日 年間第25主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書55章6節－9節

第二朗読：フィリピの信徒への手紙 1章20c－24、27a節

福音朗読：マタイによる福音書20章1－16節

今日のテーマ：ひとのたくらみ、くわだてと神の^{かみ おも}思い

三つの朗読から

第一朗読ではまったく異なる神の^{こと}思いと人の^{しめ}思い、神の道と人の道が示されます。異教の王すらをも使って捕囚から解放しようとする神の^{りょうかい}思いを人間が^{むずか}了解するのは難しいです。ですから、神の^{ほしゆう}思いを受け取るためには、神の^{かいほう}ことばに「立ち帰る」必要があります。人間の「たくらみ」や「くわだて」が「計画」へと変わるためには、神の「思い」を知り、それに合わせる必要があるのです。

第二朗読で、パウロは主イエス・キリストと共にいたいという「思い」と宣教のために^{せんきょう}働かなければならないという「思い」の間で^{うご}ゆれ動いきます。そして、自分の^{しめい}使命を^{ゆうせん}優先させていきました。

福音朗読にある「何もしないで立っている」に注目してください。「関わり」が切れてしまった人の^{かな}悲しみを^{あらわ}表しています。ぶどう園の主人は「関わり」を再び^{むす}結ばそうとするのです。「友よ」も、彼の同じ^{ちゆうもく}思いから生じる言葉です。

説教

どうしても思い出せない町の名前があります。それはイエスさまが^{そだ}育ったナザレの近くにある町です。去年、イスラエルの巡礼をした時にナザレの町に一泊しました。バスがナザレの町に入る時に車窓から見える丘陵地帯を指して、ガイドさんが^{せつめい}説明してくれました。その地名というか、町の名前が思い出せないのです。説明によると、イエスさまの生まれる頃、その丘陵地帯に新しく町が生まれたそうです。恐らくヨゼフさまはその新しく生まれていく町の^{ふしん}普請のために仕事があったのだらうという説明でした。

イエスさまの時代、パレスチナ地方はローマ帝国の^{しはい}支配の下で多くの都市が^{もと}成立し、^{せいらつ}貨幣経済が^{かへいけいざい}発達していったそうです。そんな時代背景があつて、先週の福音朗読もそうですし、今週もお金のことをめぐってお話^{はな}が福音書の中にあるのでしよう。新しくできた都市に人々は^{いどう}働く場を求めて移動してきました。労働の時間と量に応じて報酬が^{りよう}払われていくという社会の^お常識(くわだて)が^{ほうしゆう}一般化していったのだと思います。そんな社会の常識(くわだて)に対して、イエスさまは報酬では^{はあく}把握しきれない別

の価値観があることを示そうとしているのではないのでしょうか。確かに報酬は労働に対する対価です。しかし、神さまは人間の生き方、働きに応じて報酬を与える方ではありません。めぐみを一方的に与えていきます。『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』(6節)は働かない人への叱責のように聞こえてきますが、むしろ、大切なものを失いかけている、雇ってもらえなかった人への「めぐみ」のこぼれのようにも響きます。

第一朗読に登場する「たくらみ」(7節)、「思い」(8節)は、ヘブライ語で「マハシャーバー」といいます。福音の中に登場する「支払ってやりたいのだ」(14節)の「やりたい」は、ギリシア語で「セロー」といいます。その名詞形は「セレーマ」ですが、「マハシャーバー」の訳語として使われています。つまり、主人は「最後の者にも同じように与えたい」という「思い」をもっているのです。ところで、主の祈りには「みこころが天に行われるとおおり……」とあります。この「みこころ」はギリシア語で同じく「セレーマ」です。人の思いは棄て去るべき「くわだて」「たくらみ」なのです。実現すべきは神の「セレーマ」、すなわち天の御父の「思い」です。わたしたちは自分の「くわだて」や「たくらみ」を神の「思い」にできていないのでしょうか。

福音書を読んでいると、イエスさまの時代とわたしたちが住む現代とが似たり寄ったりであることに気づかされます。「何もしないで一日中立っている」人とは、おカネとモノを第一にする現代社会の中で人の「くわだて」と「たくらみ」に翻弄されているわたしたちのことではないのでしょうか？

すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り

今月は、ミサの中で「すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り」をご一緒に唱えています。簡単にこの祈りの解説を試みます。

わたしたちが傷つけてしまった地球と、
この世界で見捨てられ、忘れ去られた人々の叫びに
気づくことができるよう、
一人ひとりの心を照らしてください。

「傷つけてしまった地球」という表現にところをとめましょう。傷つけられたことには誰もが敏感です。ですが、傷つけたことには関心がいきません。いろいろなものを傷つけながら生きていくのが人生ではないのでしょうか。「見捨てられ、忘れ去られた人々」とは、わたしたちが知らず知らずのうちに傷つけてしまった人々のことを指すのです。そして、この大地と大空をもわたしたちは傷つけています。かつてこれほど暑い夏があったのでしょうか？ これほどひどい豪雨や台風があったのでしょうか？ 人間が地球を傷つけた結果、地球は怒ったり、涙を流しているのかもしれませんが。

「気づくことができるよう」。いのちの危機への気づきが大切です。しかし、気づきは努力ではできません。神さまから、かたくななわたしたち「一人ひとりのところを照らし」てもらって気づきが生まれるのです。